歌計

裏見葛葉

へ13
3102
1

へ13
3102
1-5

新刻京本蒙求

戒頌

善有善報
惡有惡報

曰

天網恢恢
疎而不漏

金言

羽
村忠

自序

孔子鳥の翅去をれくるまでと孫子雨の徒然
ある時ふる習ふ童をつどて今昔のうを法ふさとるふ
或らあ〜引のふ小薪樵〜老爺が拾ふ或はあ〜ねの去
私ふ仇を報ふる兎のふぐ〜ふ果は瓶の嫁入ふ
暮るふ志ふど團坐〜つ彼遍昭が歌のさまを思ふぐ
むどめをもうたふふ也ふ衣ふ拾ひざるの稚くて百生
そぶ中ふ鶴蘭ふる兒子ふ問ふぐく瓶の火を点ふ馬の骨

門へ13
號3102
卷1

を銜むとう肉。こいのぐれの書ふつえるうゆふ中とい。予が
いふこのうゆるくようひ侍ゑとどりよく事ゑ怪りも
うんど。ゆりふ朽木枯骨も雨後の夜ゑりあらぶ光明を發
のれあるとびむう〜画師あるどの物と見ひゑせる筆のをゝび
ようや出りん。さゑど犹ゑ馬の骨ゑ銜ゑあるぐ。彼ぐ
氣息と。ゆ〜人の呼吸も嚴寒の夜ゑ白くえゆるが
如く。彼が片を点ゑる。野干ゑの烏夜ゑ多く月のいと
あるとろゑ歩ゑるくゑる。べ〜凡虹蜺蛇蝎の氣を吐くこと

こなきゆうゑ。ひとり犹のくこふゑあるもとゆ
あれも。ゆれく耳を側りう時ゑ書肆平林堂端ゑて
葛葉の草紙既ゑ鐫をわれりとく序〜くぐといふ。
頃日物ゑまざゑとくことれるを忘れるりいまぐ筆をることを
ろあ〜。ようくこの日のるとりく巻の端ゑりんゆるるく
あるべつ。

著作堂主人

昭和九年
月二三日
購求

敵討裏見葛葉巻之一

曲亭馬琴戯編

羅一

矢田部定邦楠孝の神社を毀く宝珠を得ざり附タリ信太庄司晴俊が事

むかし和泉國信太の森に狐あり。彼再生の庇を感じ。化して人と牛犬まで。安倍晴明を産るといふ一奇事は原簠簋抄の忘誕に起り。更に浮屠氏の寓言に成る。童蒙婦女子は神に付さそのの顛末を志らざるのみ。これを説んもとより不ふれど此物語は超異で亦是勧懲の絲より出。その溫觴をさゝぬるゝ。とふ河内國矢田部の領

主小清原定邦とい武士あり。ところ飽まぐ勇者く。天道をもお
それず。又神仏をも敬わぐ。さるど弓矢とりて双なき剛者なりしぐ。
冷泉院の安和二年夏四月。田原十晴謀反の折。その分治小居あ
ぜそ。比類なき働。剃子晴ど父秀郷より相傳の剣一口を分捕
せり。この軍功小ゑりく。帝定邦を判官小なれ。本領矢田部の外小。
和泉國和泉郡信太の郷をまーぬね。定邦小加恩の領地信太に赴ぜそ。
一郷の法度をも定ぜ。ものとく。水受月のそーわ小河内を蔑足ーく。従者
影引率ー。ぜーく彼地へ到着ー。信太より南なる葛の小正覚庵
といい道場あれいとを旅宿とー。村長ど郷導ぜそ。知ところ

地ちるあく巡検ぜ小。名小ー地小信太の森ぜ来くーぜどいと手孫
ぜる楠の千枝百條ぎー生く。日影も漏さぐ茂あり。這まりぜる葛
の葉小風のまぶく吹くーれく。裏見の名さ空ーーぐ。ぜーぶこの
樹下小ぜーる祠ありく。四方小笹を結まりー。慢ど人の近づく
度を許さぐ。定邦ぜく。あるいーる神ぐと問小。村長答ぜく。當
社い楠本の稲荷とて。神体ハ一隻の白狐ぜ。この狐既小數百年を
経ぜく。地のぐーー神通あり。所願あるれぜ祈願ぜ小。その霊験
響き物小愛ぐるーぐーー。とぜ小ぜーく里人ぜ一社の神小崇まり。
これを福の神と稱ぜるいり手久ー。ぜーれどもこの神ハ人の請ぐる

を嫌ひあらざるべかりしのごく埒を結まくく。常小社壇小入る
とを許さざるべし。毎年の三月上の午の日のみ。埒を開く祭礼を行
ひとぞ回答する。定邦縁由を尋ねくくと打笑ひ世小狐を稲荷
の使令といふは倉稲魂神。元明天皇の和銅年中もじゆく現
出てこうくると。三狐天降りてくらをりつくあるん。又鳩を八幡の
使令とするは比叡山鳩峯小鎮坐の神なれば小や。鹿を春日の
使令と稱するは彼山小夢見あるべし。されど鹿を祀りて八幡と。
鹿を崇めく春日とするなるべし。只狐のみ淫婦の後身ゆ
く動されぬ人を魅さをりく。あくまでその崇を怕ぢこれを稲荷

と稱くく尊信ずることを愚なれ。夫人は萬物の霊なれ。却く獣を
神とくつくく慾を放ゆくく幸福を求るは誤るべきなれ此祠を毀
く。里人小ぶ惑ひとくべくとく。いまだあくく罵るを村長怠小
押とゞめ宣ふところ理あれども。この神ゑくく五穀をやうゑをりく
吉凶禍福を告ちくせく。霊ぞりもあくまだ祥をえせあらざ縦領主
の御威勢ありた。故あく祠を毀あり。毛を吹く疵を求るの禍あり
なん勞ひとぞまりぬくくといはせもあくざ定邦眼を瞋く。汝等
つゑを蔑小くく。きうねく狐小荷擔せば畜生の崇ぶ速なるる。
つゞ崇ぶ速なるる。眼前小ちひちをべく。者ども這奴を縛く。

清原定邦楠
本の神社を焼
矢ひて白狐を
走らせこ
のとき紀
両顆の玉
を奪くり

甘白巻 巻一

首を刎ねとり知られば。村長面色土のごく。とゞまるもろもろの郷に禍
あらせじと。くびく。首を喪ひく。何の福を求むべき。とくれとろの
まゝに討ちひて。この身の命を助ぬくとて泣〳〵。定邦ふゝびちふと
らひさもあらばんいざ。ちゝび祠を毀ちと焦燥ふぞ。主ふ拾とらぬ逸
雄の家謙ども。うけぬると回答つく。忽地笆を引破り。衆皆狸ふ
とゝ入りく。まゞ祠の潰を捻さう捨扉を左右へ閑くと。聽て走り
うりて宝殿の戸帳をさらと引あられば。裡より一隻のとゝ猛る白
狐騒ぎ怕れく。逃出るをつれ。ぢとんと追蒐〳〵。その疾と雪
花の花ごとく。形い消くあるうろ。定邦い狐をあり〳〵く安

うゝぢ拾ぬえうゝび祠ふ立りくうるふ。あゆ〳〵とふりれもあく
く戸帳の中ふ両顆の玉あうろ。趙の夜光い名のゝ宝ゆど。そ
ぢあもをさく劣るべうもあうざれば。ちく愛よ孫こびさうれ今
狐を打りうさといども。幸ふ両顆の玉を得うう。仕く吐狐いそ
の性玉を愛さとり〳〵宝珠を得く尾ふ納め常ふ北斗をあるると
ぢいよく千里の外をも察。又過去未来を考るとゝ。考るふ彼
畜生うれふ驚うされ。狼狽〳〵く玉を奉せるあうん縦うち捨
ぢくとも彼王をう〳〵あ〳〵ぢ。うさねく神力を施さうあうち
べうゝびあどいと涛うふ衆人ふ説示〳〵。両顆の玉を懐ふ

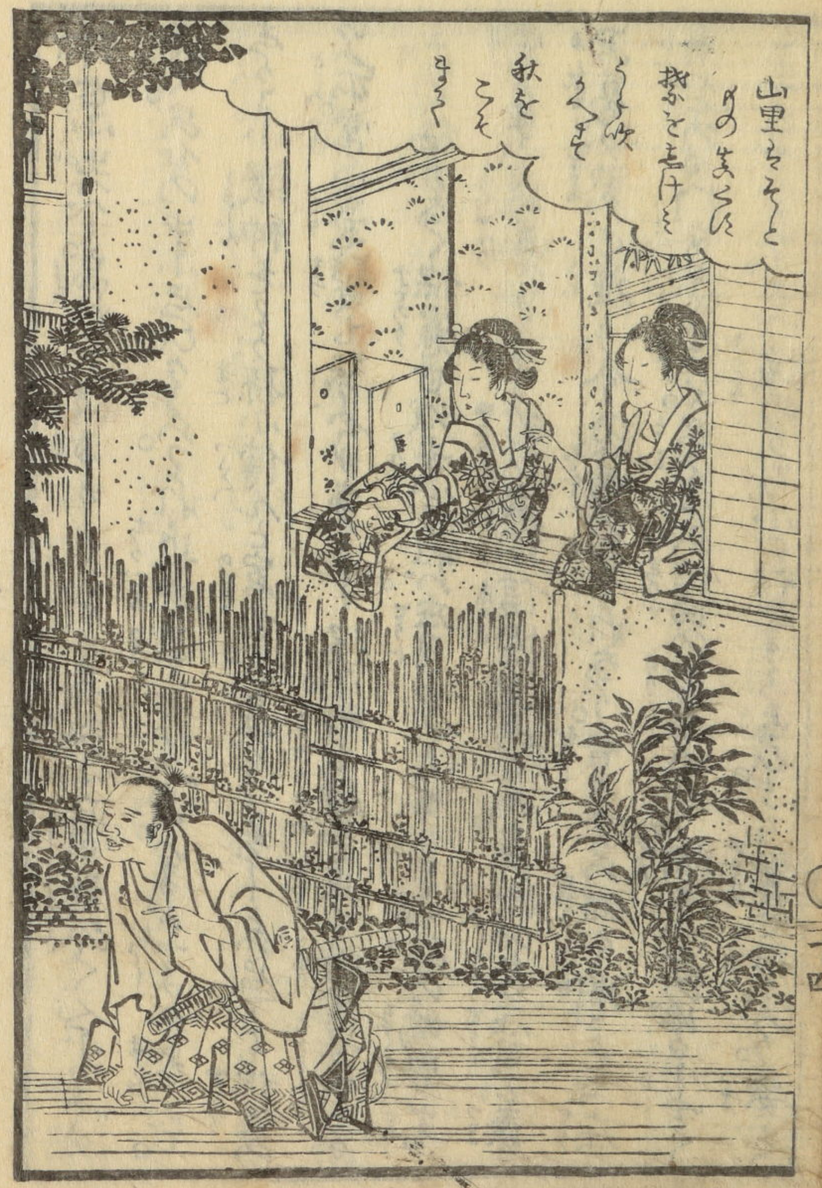
く。祠を立出つ従者をえうり。汝ハ彼草鞋大王の故なるを去れり
ハ。智勇の士淫祠を毀く。民の害を除し例和漢ハ多し。祠
をこのまず。彼抵あくびうり栖ともありあん孤もとぞめ
焼き〳〵とて知されい士卒うけぬり。扉を踏碎て林火つけと。
燧とり出く火を放ぶるく彼此ハ燃うつ。ひくとせあり楠
本の神社灰燼とありてうせよるれば。村長いかもさくこれをえ
る里人ハ涙を煙ハ紛らしつ。嘈然として嘆息せり。とふ又信田の御ハ信田
庄司晴俊とふ郷士あり。その妻を真葛とふ。夫婦ゞ中ハ一人
の女児をもり。名を葛の葉と呼く年既ハ十八ゼ容止の艶麗ある

のこあくゞ。ゞざまもあつうあくゞ。鄙ハ佛げあ兒未通女あり。抑庄司
晴俊ハ父祖相傳の田圃あまくあくゞ。その家貧しくうゞしゞ。
いと弱ゞ人を憐むのそろあく。物を施しく惜とあり。加之年
來易學ハ志ふくうしゞ。ゞいねる天慶年中洛ゝ陰陽頭加茂
保憲ハ隨く。天文地理ト筮說相の奥妙ゞ究くうゞ。ゞをあく保
憲その誠心を感ゞ。籃笈盥内傳金烏玉兎集の両秘書并ハ吒
祇尼天の法術を庄司ハ傳受し。只曆の道のゞをゞのる光栄ハ
傳へくう。庄司ハ秘書奇法を受くふく誇ひ有一日保憲ハヤ
るゝ。師の恩惠の廣大あるゞ。ゞえく云禁ハ述ゞ。なゞ忘らく

い識神を使ふことを許めゝ〜と希ふ小保憲答咲く汝ぢ器量
識神を使ふ小足らぬことをとゞ汝ぢ外孫小侍んと呂ふ之れつゝ
つゝ汝ぢ久後を考るよ年五十小及ひ小災あり是宿業のなせ
ところ小〜く逃ぐ〜。考るを今り〜識神を使ふことを許〜あり。
災の来るとも又速小去く。年齢三十をも超べ〜ぐ。汝ぢあ〜ぐ
し也陰陽の道をゆく。分を立んと呂ふとあられ。又ゆるぐ〜く天機を
ゆら〜く。人の吉凶禍福を混とあられそ呂ふぐといへども孟あひ小
似ざるとぐ。これをぐわより師弟の因を締とをゆ〜ゆと志の
切あ小黙止ぐ〜くしむぐまあく指南せり。志いあれど汝元来陰

德をとぐ。死後小ゆり。外戚の孫ゆもて堅来く。外祖の名を輝
まべ〜。この〜ゆ努く等閑小ゆそと混示せ。庄司謹て師の命
をうけぬり。遂小辞〜ゆれく故郷信田へ立り〜ぐ。數年の
拝学小験の金錢を用亟〜。所持の田圃も弱りさく京小結
却〜とぐ〜のさまふもあ〜ぐありよそ〜ぐいふくゆ〜ゆの薄命
をゆ〜ゆ。道小閑ゆりとぐ〜ども求く人小施さとあく。と徒郷小世
を逃りる。彼加茂保憲とは〜の孝霊天皇第三の皇子稚武彦
命備中國小封ぜらる。その後泡吉侍公霊亀二年小入唐〜。五経三史
陰陽の諸藝。とぐく傳く帰朝〜。聖武帝の代時右大臣ゆり孝謙

帝の御字加茂の姓を賜ふ。をのちに保憲に吉備公七世の後裔なり。陰陽頭忠行ゞ一子あり。稚なきより文章双ぶなきなり。古今未曾有の陰陽師なりしゝ。晩年に及ぶまでこゝろざしの死期をやがてうけん俄頃に和泉へ入きつゝ。信田庄司を呼よせられちなに命孫らんと欲す。約束のごとく。識神を以ゞ未生の孫に使とへ物とーく。きつさるなり。事とーくあーゞるとあーゞれ今夜一孫反橋のもとに識神を封じとゞめ汝が孫の世に知るを待ん。潛に従ゞ来ると仰くとの夜庄司兵一人を伴ひく。彼橋の辺に到りふく穴を掘らせく二ッの壺を埋ゞ今ゝより三千年の後この地に人を埋るとあり。その時識神世に出ゞべ。忘れても呼ぶべゝとゝ耳語に庄司驚ゞく人に知らざるなく。兵ひの中に兵ひとりとれ近曽妻をむかへ一子を挙げ。きりに識神をもて孫に傳んと宣ふ。ひと抜ばつゝ有ゝと兵ども保憲の所に常に寵髪もなゞ有りゝ。程に耶も疑ゞ且く洛に返留せるよゝく。極りなく保憲世を去ゞれば庄司ふくゝちゝとく。師の嫡男光栄と称に送葬をとり執ひ遂に信田へ立ちつゝその次の年庄司が妻に葛女児を産り。今の葛の葉とぞ有り。昔ゝ姑く閑さても庄司ゝとの母門方に立出ゝ兵ども信田の森に有り。烟に立のぼるに有ゝ。ところあやゝとまづ懐のうちに入れをうるるうち驚て裡に入り妻と


山里そそと
月の美しく
撥かを上げて
うゝ吹
えくまを
秋を
こゝに
まゝく

きのさの
信太左司
途り定邦を
諫むその妻
真葛その
女児葛葉
家りあり

女児ハいつりくるへ。然る定邦血氣の勇ハ絶り。今楠本の祠を焼
うゝあひく。既ニ禍の胎を懸り。これ彼人の領地ハ住あゞ。こゝと
を諫ぜんあゝゞとく。連忙ゝく衣服をあらゝゝ彼森林に投ゝ走
りゆくハ。途ハく定邦ハ彼あゝり。庄司ハ道次ハ出むゝ。これハ當
処の住人ニ庄司晴俊とゝふものゝ領主ハゆゝ死ゝあり。志だゝれ馬
を給られゆるべゝとゝふを。定邦遅ハゝく。とゝ行るゝ。ちゝくまゝりて
ゆゆゝと回答さるハ庄司ときゝ。楠本の神ハ灵驗揭焉志く
民ハ福を降ゝゆゝをゝく。里人ゝゝ敬ゝ信さるゝ年久ゝ志ゝを
今敬ゝ志ハ焼ゝゝあゝ剝その宝珠を集ひとゝあゝゝ志ゝるべゝゝ。

むゆく祠を再建ゝく。玉を復ゝ納あゝるゝを願ゝゝ。ゝゝ志ゝハ
ざゝんハ禍のまゝるゝゆゝ。ゝゝゝとゝ速ゝゝべゝとゝふ定邦ゆゝく
嗤笑ひ古民ハ愚ゝゝものゝゝゝゝゝ郷ゝゝるゝの云ハハ伝げゝ
ゝ。今の世ニ神名帳ハ漏さる神ゝまゝゝゝゝゝゝゝゝ。ゝゝ
例をゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ彼祠を破却ゝゝく民の迷を解ゝゝ
用の古をゝ動ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
頭ある神もゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ハゝく徳を聖人ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
卑むゝゝハゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

をれ庄司汝何もれあるべき漫小辱を翻〳〵と沮んとはさる這
奴縛く張宿へ引とり知されば村長坊をもくやあう庄司へせとの処
の郷士小〳〵く信あるもれ〳〵弾さ〳〵むう〳〵加茂保憲ぬ〳〵小陰陽の
を学ぶ。勉く人の為小吉凶を説ぶ。ども〳〵人の為不〳〵
今この人小向後のすを並せ。その言弁合せば不敬の罪を許〳〵ぬく
〳〵とやふぞ。定邦やすみく怒城坊さもれ近曽新小この地を領さて
世ふ。ぶ〳〵清度を立て民小奸邪あり〳〵者ん〳〵さる打〳〵も彼怪死
を物小を吐て衆人を迷さんとさ。その罪を糺〳〵ぶ。ども村長ら
ん〳〵不も又理あり。今日〳〵小何〳〵ある汝誠よこれを並へ小不

都ぶ〳〵も違あば明日小許さまば。とく〳〵焦燥小庄司ぶ〳〵考く領
主小今日一人の愛臣を沼ぬふへば。さねど白狐の崇を脱ぶ〳〵く祭
り〳〵ぬく。もし〳〵ぬ小物を三さび失ひぬふるあり。この言聊も違ひぬば
〳〵ある罪小も行ひぬへとも。惣るもあく述さ〳〵るさねど定
邦小実へるもやぶざ〳〵ん〳〵く祭く何れ向答小も及ぶと馬をまぬく
沼ぶ〳〵ば庄司へそ〳〵を同送り〳〵。只管小嘆息〳〵ぬく袴の塵
〳〵ちを〳〵ひと幸意あげ小〳〵る。

千枝丸まく次宅を厭小并ニ石川悪右衛門
人小憑〳〵る狐を釣る事

うくく矢田部判官定邦が旅宿西覺庵へ立寄るが須臾して六月
のもじやぶく暑氣烈しきが絶日巡行して咽喉乾き堪ぐる
れば旅宿ふらつり入るとあぐくとく湯沸りそのあるを手ずから四五杯
うあるを呑み手。清き磁器が湯を汲くくして定邦忙しく
とうく息もせざど飲をうり。今一ッとあるをまたび汲来れりこれを
も飲くあるを一ッとく飲むが。さざ三度の湯をどめんぬるく次
いで熱し。その次の湯いと熱しくにをつけぐる程なれば定邦
大ぶ嘆賞し。この主手よく人の心腹をきりく。才学抜群く手蘭な
び物の用ふもるべきなれどとふが顔色麁くく如ふくくえま

ぬ。情あれば。ちくくと話ふ色にて。この夕住持の僧と物語りの
叙ふ。彼主手の才智さざ〳〵を賞美し。彼りのをうをうり
ぶさせのく。化するあく石住ふべしとは。住持の老僧つくづくと
うちやく。數ふもあしぬ弱輩を。領主の懇望しぬるこよ
あれば幸福。ちいあれど彼はさるつ手。愚僧劫化のあるがとう
五畿内を行脚せしとる。摂州阿部野ふく拾へる蘭るこの
ちいあり當才ふく。養ふべきやうもあるれどと憐ふも便
あるれば。こに携うり。里人ふ乳をりしひざどつらくく
養育ふ手やつりくナ五才名い千枝丸と呼てあ。ちるる彼

又過世佛縁やありけん。幼少より仏の道にこゝろを寄たれ
ば青雲の志なし。かねて遠からず剃髪いたさすべく思ふ
なれども。いかに勧るとも仰に従ふべからず。母なれば。俗事の趣をよ
くつたへ彼が思ふ程もはてしと回答なし。千枝丸をよびて。
如此のうへ。汝何とか思ふと問ひ。千枝丸答て両親のかくまで
召させ給ふうへと有がたくいへども。この身又母に捨らるゝも。
出家さするべき為かとけふ襁褓の中より師の坊の養育を得
く。今は宿願とも遂べき時なるに。仕官いたさんずると思ひもよら
ぬといふ。定邦寺跡にて。志の健気なるをいたくに感じ。これも又

いかく慕ひ永く召仕んといふ事もあらざれし。五年が間奉公せしが。
望ごとく出家させ別に一箇寺を建立して。汝を住持させと
の寺へも殿の寺料を寄附して。めでたき道場となすべし。
ありながその志を破らせ。功徳却て莫大なりしん。両親をれなく
もうけ引まじきといふに。住持はこれをきゝて。如此なるには千
枝丸はさらなり寺の幸その上あらじと思ふから。よろこび千枝
丸に對して。かくまでいふなるを固辞すべきにあらざれば。すべて回答
せよといふに。恩高き師の坊の玄空に辞止がたく。領主へ元來短
慮ありといへるに。両親従ひて。その寺にいる宗ありなん

判官定邦
正意庵の
行童千枝丸が
さいらめで
戈智よ先き
住持よ乞受
河内へ将て
うつる

葛葉巻一

かと思ふに浅ましく。已を得ざれどもうかゞひとゞめしが定邦
ふかくよろこびて。かくて主従の契約し我のところを思ひよ
せぞ。これより楠木千枝丸とよべり。この時にこそ庄司が今日一人
の愛臣を得ぬべかれ。といひしを思ひあはせて。彼が
人々にあらざるところに嘆賞せるといへども。それにやはひ侍る
公禁に聴て口外へは出さず。五日のゝち一郷の賞罰悉く定
めおかれ。正覚寺へ賜の施物などや遂に千枝丸をゐて本国
河内へ立かへらんとすと留守しる家隷ども出むかへ悉なく郷を離し
ける時に家より久しく庭井十郎といふ男出て厳に和泉へ

癈足者なひつる三四日のゝち宮本どの心持例ならずて悩を出しと物
するが氣色ゆかく正なくなるすども言はむし左右なく人を
近づけず。かゝく醫師を招きて療治すといへども。今にさせる験
なし。人を走せて告やらんといひしかど。帰館に程ちかければまかく
蹤止せしとかや。定邦の内室は四年以前に世を早うし宮本とい
へる妾あり。容止の比類なきのみならず心ざまいと怜悧なり
し程に定邦これを寵愛し。さながら正妻のごとく管待せしに。
今このうちをゆかく眉を顰め。うちつらく信田の社が祈禱と称
し。かれ彼地に到りしばかりあるとぞ。楠本の祠を破却して

玉を落とす。又信田庄司が妻りしる。手枝丸を石倶〜さるる。お
ちるく物くれば庭井十郎うち驚たく。宮木小つたく思へば微
笑ふく。たちまちに椅車の祠を建立して。玉をもつて〜思へ〜
と薦亞ども定邦我慢の壯夫なれば頭を左右にうち掉くに弓矢とる
身のいひびあく。かぎりの崇を怖れく。世〜に所れをあとべたち。
彼狐の分際ふく。行程のうちをうちあらんいでられ放〜沼させんとく。
つと立あがり。庭井十郎小案内させく。宮木が引龍する一室に到り。隔
の襖をさつとあられい宮木艶さる容止も日来小変り長ある黒髪ありし古
〜く眼の光常あるに。被る單衣の袖も裳も引摺雛く。雪の膚を

あらひ〜。定邦とうく声をあらるを。小罵りくるへ。をれ悪判官汝領主の威
勢を逞〜。行程長小うぶ祠を毀くを。これ速小汝が身小実
あるまじう思ひ〜うど。近曾千晴誅伐のとたとよあれ軍功をあらく。
帝のれ勅ゆえめでられい旦く怒をの〜うぶ玉をうへく祠を舊のご
とくはせどい飽まく宮木を苦やく。命沈隕さんるを千日ともまじへふや
いふと語られば定邦奮然とく大小怒り。この畜生あるをうぶあを
を走〜ぜとい死あたく。弟うる千晴が宝剣を抜むなせい宮木うくと
お笑ひ。れい宝剣明鏡ゆも惜うぶ。又墓目鳴弦小も怖れず。尋常の
野狐とひとく〜ふるあられ。汝切べ手く切れ。ゆうく毛妖を殺あば。

因果の道理をもあらべし。とく切れ。とく刺け。首をも打。胸をも刺と
わたさるべきあるべきなんといひく欺けば定邦い歯を切り。剣をさし挿て
しくちさうしぶりの所をもて抵あれ形い宮本あるものを一時の怒い
ゆるしとく殺さんもふ便こ。信田庄司ゆるされは説く。愛をもるれを失
ふべしといつるいこのゆあるんとんづ。遂い剣を鞘よ納さやく。舊
の処へ走り出。庭井十郎小耳語るい彼畜生既い牧百手を預さうと
拔はゆるよ。剣戟をもつて威しげ。名さるる後験者を招とく加
持させのといへい十郎うけぬつく。験の後験者を集會ふ速い禳
ひ除うせんとする小宮木いまんく招ひ小招ひく。さ小験もあるしべ。

定邦ふく憂く。ふく〳〵びく庭井十郎を招。今さらふ合まれ。信田庄
司ゆひしるども家ゆうはいと彼い加茂保憲小陰陽の道を学ひるく
といへかる物怪を禳あるあるども抜群るべし。ちれども彼れ嶋小彼ゆ
諫をきるぞ。飽まぐ廣言をるとりて。今さら頼をぜえんも面目な
ゆ小世小庄司よるし。陰陽師のあるるいもあ比法ゆあるく
いあるるといへい十郎ちぞし。孚思く。近曽人の語るを安く小當國横
尾巔の梵鹿瀧畑といふところ小石川悪右衛門といふ浪人あり。原付國の人なる
をを志しまで。弱年のころ。陰陽の道を知。徳法師小学ばんとも公曽ゆれ
ト笠のゆ小ゆをとるべ近曽瀧畑小まく〳〵山猟を業とする小猪鹿を

捕るの虫を吹ぶごし。就中狐を為る小妓あり。いろある年孫る野
干あり。彼が弥を脱るとあり。とどもろれども小憑る狐をばいであ
るべからんまづ試に召るのせく。彼が小系を小はぬんとヤるれば定邦あり。
あろこびてかるくあり。と考ぶ。爲ども早告ざりしその悪右衛門とあんをとく召
せとの小庭井十郎ところを見るく真小瀧畑小赴たり。あるべ悪右衛門を
伴ひあるく。主君小くとヤセーるべ定邦ものく召せるく彼男をとろ小年紀
い三十有餘小して。身丈い五尺六七寸ひあるべく。眉濃く眼圓く頬髯青く
生ぜり。定邦いとの骨柄の逞しきをとるくいと利りく恐えちく招く
あくーるどもどころ。ぜ。汝よく彼狐妖を除ぶ。恩賞全たまりたべ。但

法をのく除んや。又技をのく除んやーと思ぶ悪右衛門や
頭を擡それぐ。初稚とぞとく陰陽の道を学ぶとい。ども加持
祈禱も面倒と弥をのくその狐成生拘べ。さべく狐の人小憑るる。
足の凡さ犯より皮肉小ふけるあどいひ伝へられどこのヤ系小誠ーい
らぞ故いろふとあれが狐の憑ぶるる人の袂小ふあまる獣の毛あるるの。
色皮肉小ふけのるる悪あるぐ。衣服の間あどい躯居ると思ーるの五臓
小ふけのるとも物食小犯と糞さる犯人の體を離れでいあるべ犯。
その時を考るく餌をのとこれを誘引ぶ輙く生捕べーとくるもあげ小
あぶぞ。定邦いとく教く汝ぐの所悪く理ありとく犯の躯小ちくぶ犯と

叮嚀に礼をのべて悪右衛門又いひけるは今宵それがし一人看病に
進らせそろ。狐の出る路をうん定めの夜ふるを知べし。りいさく牡ひあり。
走せまゐ犯る。小繁が留こもおれたるんこの夕許しあるべしといひも果
嶽小定邦うち跡ひく。狐ぞふ除たるべ宮本を縛ぬくとも何ら厭ん。
汝長途の疲労もあるべし。まづ且く休足せよとて。庭井十郎に
案内させそろ。一室に憩せ厚くこれを饗食しそる。かくてその日も暮し
ら宮本がほとり小人城遠け。悪右衛門一人看病せるに。この夜い殊さ
ら牡ひ罵る程に走り出んるを怕れて。様の真柱に宮本を縛りつけて。
ざと庭のくさある障子を押ひらきて狐の出るを待ゆ夏の夜も更ぬて。

夜中の月も猥なくさしかく小宮本に犯ふるをとく安しと自睡やうなりしが狐の果
しく外面へ出そろ。寄生のもれありせばくともちろんぬべきふあらねどその技に
長くる悪右衛門つれば。あくこと密しくその路径をよくくと定め夜あ
けく浸潤小定邦に中たせそろ。某が呂に違ひど前夜狐の犯ふる路を知
ぬろれば安られ今夜の決しくく許さずといふ小定邦に世ともうもしげ
ふく管待なぞ宮ぬやまいそろ。て悪右衛門。その日嵐を油ふく揚さも。
用意の弦小こを著て時刻を考ふ夜も深あんとさるこ狐の出る
道の汚ふ。件の弦を掛延さう。定邦に通夜疲もやうまどぬるを遅しと
起出ぬく。彼一室に行くこを宮本に前後もきらず熟睡し悪右衛門消

石川悪右衛門
宮木を憑こる
狐を捕る大
和川へ投
ける

殘る燈ふさ〜對し鎌髭拔く居らうしゝ定邦さそこへうろくいふと
同ふ悪右衛門を起〜くもむ〜殿まづこれをれ送せそと回答く。
襖の蔭より白狐の四足を縛る牧宙ふ引提てさ〜出せば定邦常を
拍〜驚嘆し。誠ふ後生恐るべ〜世ふ猟夫ハあまたあれど人ふ憑心
さるる[illegible]海ふ外ふあるべうも覚えぞいでこれ必ずうう臨ふ〜く。
目家の[illegible]れうさんとの力の鞆ふ[illegible]をかるを悪右衛門押とゞめ狐
數百年を経さうとゆへども弥を脱るくへあらざるふ宝珠を失ひく
神通力ふて却く嗜慾のところを生じるるふ[illegible]かる妖怪ど又ふて
殺〜ぬべ。死灰ふくび障礙をあとべ〜ふ〜より蛇ふ手ふして新く

復活狐五百歳ふ〜く生をうゆるとゆう是をふ簀巻ふ〜く大和
川へ[illegible]れば忽ち禍神を祟ふ〜く。永く障礙をあ
きづとゆふ〜くもやうこのう海ふまるるあるべと
もくも。まづ婢ふ仰せく。宮本を別室ふ扛めうとて。
勦らく。悪右衛門ふ曰く。悪右衛門ふ煉の長さるを説
くつどひ来うう只管これを賞美〜て已
ず悪石衛門ふ責巻ふ〜石を錘ふ着て下郎二人ふ扛擔ハ
せ大和川へ出つ[illegible]流ふぞ沈わるる。
次討裏見葛葉巻之一畢